

Title	浙江省慈溪縣城小東門外遺蹟
Sub Title	The prehistoric site of Tz'uchi, Ch'echiang Fprovince, China
Author	江坂, 輝彌(Esaka, Teruya)
Publisher	三田史学会
Publication year	1952
Jtitle	史学 Vol.26, No.1/2 (1952. 12) ,p.125- 128
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19521200-0125

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

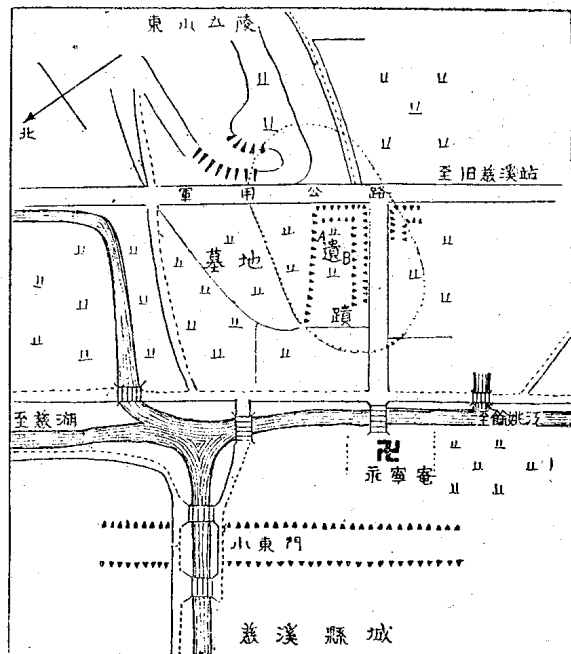
The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

浙江省慈溪縣城小東門外遺蹟

江坂輝彌

昭和二十年六月某日、軍務により浙江省寧波より砲を積載貨物自動車にて、この慈溪縣城小東門外に到着した。砲を空襲待避の爲直に附近の叢林に隠し彈藥等整理後、少憩中ふと永寧庵に入る軍用公路兩側田地の溝より掘り出された泥土上を見ると繩席文・條線文等が施文せられた土器片が散亂して居り、早速その附近を詳細に觀察表面採集を行ふと鬲型土器の足片繩席文・條線文・印紋土器片・朱塗の彩文土器片・凝灰岩製の扁平磨製石斧片等を拾集することが出来、又永寧庵兵器倉庫に至る軍用公路を作つた爲B地點附近の田地下の黑色粘土を掘り取つた凹地の黑色粘土露出面に大石塊・材木片・土器片等が介在するのを發見・又永寧庵に至る軍用公路の兩端附近の土塊中に土器片の介在して居るのを拾集した。(第一圖参照)斯くてこの日の永寧庵前の田地に中支那地方新石器時代の低濕地遺蹟の存在することを知り、この慈溪縣城に駐留間本遺蹟の調査を行はんと考へ、砲監視等に於ける間の寸暇を利用し小試掘等を行ひ本遺蹟の大略を知ることが出来たので以下にその結果を報告する。

浙江省慈溪縣小東門外遺蹟(江坂輝彌)



て、浙江省立杭州西湖博物館に寄贈した。

遺蹟

本遺蹟は浙江省浙東地區を流れる浦江の一支流、浙東地方一の都邑寧波より左折西々北、餘姚縣城方面より流れる餘姚江の左岸の慈溪縣城外東北角に存在する慈湖より流出する一小支谷に面する慈溪縣城の東より西へ延びる東山丘陵の小支立が小支谷左岸に延びた先端部附近の南面に位置し、行政區劃は浙江省慈溪縣慈巽

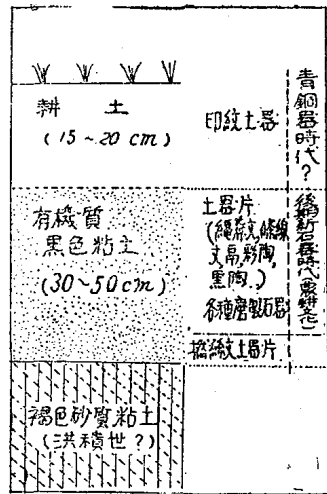
第1圖 慈溪縣城小東門外慈巽鄉遺蹟近傍圖

猶この小東門外遺蹟に於て發掘探集せる遺物は寧波所在の中華民國僑政府中央儲備銀行寧波支行の陳德善氏を介し

郷に屬し縣城小東門外の永寧庵と呼ぶ一寺院の前方田地一帯である。(第一圖參照)

本遺蹟へは當時寧波より舊浦杭鐵路を除去した杭州・寧波間の軍用公路を華中鐵道經營の鐵道バス長汽途車にて慈溪に至ることができた。

遺蹟は小支丘に南面する永寧庵前の田地及び小支丘先端部附近の南斜面に亘り、田地においては表面耕土が十五糎乃至二十糎あり、その下に三十糎乃至五十糎の厚さを持つ有機質黑色粘土層があり、その下には上部洪積世の地層と思はれる褐色砂質粘土層がある。而して耕土には印紋土器片、有機質黑色粘土層には石塊・材木片・獸骨・繩蓆文・條線文・鬲・彩陶・(朱塗)黒陶土器等



第2圖 慈溪縣城小東門外遺蹟地層斷面圖

土層最下部褐色砂質粘土層に接する附近に於て可なりに多量の撚絲文土器片が包含されていたことである。(第二圖參照)

及び有段扁平石斧
・鑿型石斧・石包
丁・石鎌・石鏃等の各種磨製石器類が包含されて居り、ことに筆者の注意を引いたのはこの有機質黑色粘

遺 物

一、自然遺物

この有機質黑色粘土層中には相當量の樹木片が包呈されて居り、計畫的に綿密なる發掘調査を行へば樹木の種子等の發見の可能性もあり、當時の植物相の一部を知り得ることが出来たと考へるが、遺憾ながら軍務の寸暇の調査であり何等得るところはなかつた。又該層よりは若干の獸骨片も發見され、キノシ科の下顎骨片等が見出された。

二、文化遺物

土器、上層耕土よりは多くの印紋土器片(花紋)が發見され、色調は鼠色乃至暗赤褐色の焼成良好なる硬質のものから、灰白色乃至灰鼠色の焼成脆弱なものまであり、その文様は二重菱文、二重圓文、二重F字文、蛇行文等のものでフィン氏が香港船遠州(註一)で發見されたものに近似する。

有機質黑色粘土層よりは繩蓆文・條線文等を施文された赤褐色、黒褐色、茶褐色等の長石粒を含有する粘土質粗雑な、焼成は比較的良好な土器片、同様な粘土質焼成の鬲型土器、灰褐色の比較的粘土質の密な土器に朱を持つて模様塗彩した彩文土器片、それに極く僅少ではあつたが粘土の内部は灰褐色で表裏面が黝黒色に磨研された黒色磨研土器即ち黒陶の小破片も發見された。又灰褐色

土器片に透刻りあるものも存在した。

これ等の土器片の包含層附近より、湧水甚しく、軍務の全暇に行ふ一個人の調査にては如何ともなしがたく、遂に有機質黒色粘土層最下部、褐色砂質粘土層に接する附近は十分なる調査を不可能としたが、極く僅かな地域をこの深さまで試掘し、最下層より橙褐色の甕型と考へられる撚絲文土器片を數片發掘した。

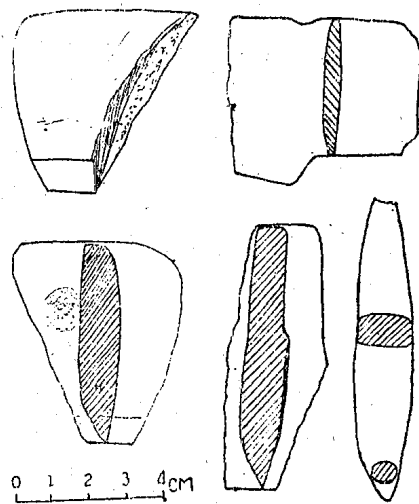
以上が該遺蹟發見の土器片であるが組織的な發掘調査を行つたものではなく、僅かな小試掘であり器形を推知し得る如き大破片は無く、私の採集した小破片により推知し得る器形は印紋土器（花紋土器）に於ては口頸より外反したく字型口頸を持つ壺型土器と考へられるもので、斯る器形のもは香港船遠州（註一）よりも發見されてゐる。又有機質黒色粘土層發見の土器片中、繩席文、條線文のもの多くは甕型と考へられるが明かでない。甕型土器のみ大體を推知し得る如き大破片が一個出土した。黒陶、彩陶は小破片のみにて如何なる器形が全く不明であるが、唯二耗前後の薄手のものが大半をしめることにより、餘り大型の器形のものが少ないことのみは推知し得たところである。

又最下層發見の撚絲文土器片は口縁部と底部を缺くが、胴部のカーブよりして大體に於て香港船遠州に於てフィン氏が最下層より發見せられたと云ふ撚絲文土器に近似するものではないかと考へる。

浙江省慈溪縣小東門外遺蹟（江坂輝彌）

石器、石器は總て磨製石器で表面採集品の外は總て有機質黒色粘土層中より發見された。繩席文、條線文、黒陶等の本文化層出土の土器文化に隨伴するものと認められた。

石器の石質はその殆どが粘板岩乃至頁岩と思われる水成岩質の岩石であり、有段扁平石斧、鑿型石斧、石包丁、石鎌、石鏃等の磨製石器が發見されて居り、第三圖右上は石鎌の先端刃部の缺損したものではないかと考へる、頁岩製。



第3圖 石器類

中央下は有段扁平石斧の半存品で片岩質の岩石製であつた様に記憶する。右下は磨製石鏃と思はれるもので、非常に肉厚であり未製品の如く考へられる粘板岩

製。第三圖左上下は石包丁型石器の破片の表裏面を示すもので、北支那、日本に於ける石包丁型石器に比較し肉厚にして整型が粗雑で原始的な感を與へる粘板岩製。以上で本遺蹟出土の石器の記述を終る。

其外木材片等の出土はあるが加工痕を留める程度の丸太、板材

等で、發掘面積も狭少であり、建築用具としての詳細を知ること
は出来なかつた。

結 語

以上で慈溪縣城小東門外遺蹟の記述を終るが、本遺蹟調査のノ
ートも總て持ち歸れず、三年後の今日記憶のみにより本報告を執
筆したのであり不備な點の多々あることはまぬかれ得ぬところ
であるが、現在までに報告せられた遺蹟中繩席文、條線文、黑陶を
出土し純新石器時代の遺蹟と考へられるものは江南地方において
は、浙江省杭甬第二區良渚鎮遺蹟(註1)あるのみにして、其外湖州近傍
錢山漾遺蹟(註2)が或は純新石器時代の遺蹟なるかに考へられるが、そ
の報告書が極めて簡略ものであり、明確な内容を知り得ないこと
を遺憾とする。

又上層出土の印紋土器を含む金石併用期より青銅器時代への江
南地方史前遺蹟も紹興以南は事變前全く未開拓の地方であつた。
猶良渚鎮遺蹟に於ては黑陶が出土器片の過半数であるに對し、本
遺蹟に於ては繩席文、條線文土器片が過半数であるという相違は
あるが大體同種の土器片を含む新石器時代文化期の遺蹟であり、
今後の江南地方新石器時代文化研究の一步ともなれば幸である。
又この土器の包含量の相違は地方差か時代的差異かは江南地方
今後の新石器時代文化研究に待つて解明されるべき問題と考へ

る。

又該遺蹟上層出土の印紋土器は杭州古蕩、金山衛のものとは異
り、香港船窰州のものと近似すると云ふことは、少くとも印紋土
器が二つ以上の時期に編年出來得ることを示しているものと考へ
られる。

又温州近傍、浙江省樂清縣海涇鄉鳳凰山麓にて發見の印紋土器
遺蹟は古蕩遺蹟同様のものであり、青銅製の劍破片等を伴出した。
又筆者は事變中、台州列島下大陳島にても史前遺蹟を發見したこ
とを附記して置く。

以上筆者が株陵關遺蹟發見以後の江南地方發見の史前遺蹟の概
略を御紹介したが、これ等に就いての詳細は後日を期し、今回は
慈溪縣城小東門外遺蹟の概報をなし、その責をはたしたいと考へ
る。

(註1) Pater D. J., Finn S. J. Archaeological finds on
Lamma island near Hongkong.

The Hongkong Naturalist III 3 and 4 (1932) ~ VII
3 and 4 (1936).

(2) 施昕更 杭縣第二區遠古文化遺址試掘簡錄
江蘇研究第三卷第五・六期民國廿六年

(3) 慎微之 湖州錢山漾石器之發現與中國文化之起原
〃